

聖書:ルカの福音書23章32~43節

説教:あなたはパラダイスにいます

はじめに

受難週に入りましたので、今朝はイエスの十字架の場面を開きます。イエスはユダの裏切りによって逮捕され、その夜すぐに裁判にかけられ、ピラトによって死刑が宣告され、ゴルゴダの丘に立てられた十字架にイエスがつるされます。そのとき二人の犯罪人も一緒に十字架刑に処せられていて、そのうちの一人が救われていきます。なぜ彼は救われていったのか。そのことを見てから、皆さんが最も不思議に感じておられるだろう43節のことが、いったいこれはどういうことなのかを考えていきます。

1 イエスに出会うとき

1) 自分とおれたちを救え

この所に登場する二人の犯罪人。このままでは紛らわしいので、わかりやすく最初の犯罪人と二番目の犯罪人。そのように区別します。

39節を読みます。「十字架にかけられていた犯罪人の一人は、イエスをののしり、「おまえはキリストではないか。自分とおれたちを救え」と言った。」

十字架にかけられながら、こんなことを言うのかとあきれられるかもしれません。しかしこの犯罪人は、人間の姿を代表しています。私たちだってこんなことを口にしていたのではないか。「神が私たちを愛していると言うのなら、困っている自分を救うべきである。」この犯罪人と語っていることとほとんど変わらない。いったいどっちが偉いのか。神よりも自分が偉いようなことを言いながら、その愚かさに気がつきません。

2) 自分のしたことの報いを受けている

二番目の犯罪人はこう言います。40, 41節。「おまえは神を恐れないのか。おまえも同じ刑罰を受けているではないか。おれたちは、自分のしたことの報いを受けているのだから当たり前だ。だがこの方は、悪いことを何もしていない。」

最初の犯罪人が、自分の罪にはまったく触れず、イエスを神と認めず「救え」と命令していたのとはまったく対照的です。この人は自分の罪を認めています。そして、イエスについては、「この方は、悪いことは何もしていない」と言います。この犯罪人がイエスに会ったのは今が初めてのはず。それなの

にどうしてこんなふうに断言できるのか。なにかを見たからではないですか。十字架の周りでは、ローマ兵がイエスの衣を分け合うためにくじを引いて大騒ぎをし、人々があざ笑っています。そんな中で、イエスは34節でこう祈る。「父よ、彼らをお赦しください。彼らは、自分が何をしているのかが分かっていないのです。」

二人の犯罪人は、自分の欲望を満たすことを生きる基準にしてあらゆる悪に手を染めてきました。ところがイエスは、十字架につけられていながら、そのことを恨むのでもなく、嘆くのでもなく、ただ自分を苦しめている者のために静かに祈っています。それまでこんなことは見たことがない。ことばにならない衝撃を受けます。聖い方がそこにおられる。この方には何も罪がない。そして、イエスのからだからまるで聖い光が輝いているようなのです。その聖い光が、自分の中に隠し持っていたどす黒い罪を照らしだします。その光に導かれるようにして、自分の罪を告白していきます。

3) 私を思い出してください

二番目の犯罪人の告白が41節で終わりません。42節でこう続けます。「イエス様。あなたが御国に入られるときには、私を思い出してください。」

この方が罪のないキリストだと思ったなら、「どうか自分を救って下さい」と言いたくならないでしょうか。ところが「私を思い出してください」と言うのです。どうしてでしょう。おわかりですね。自分の罪の大きさがわかっているからです。罪がなかったかのようにして、「救って下さい」と言う資格など自分にはない。神の御国に招かれる資格がない。それがわかっているのに、「救って下さい」とはとても言えない。それで遠慮がちに「思い出してください」とだけ言う。

でもどうでしょう。これも不思議です。こんなに自分の罪を認めているのなら、何も言わない。黙っているべきではないでしょうか。そもそも、イエスが自分のことを思い出したからと言って、何も変わるはずはない。それがわかっているのに、なぜ言うのか。この疑問は最後のところでまた取り上げます。

2 人の子の日

1) いのちを救おうと思う者、それを失う者 (17章33節)

イエスは、ご自分が十字架で苦しむことをあらかじめ語っておられ、その日のことを「人の子の日」と呼んでいました。その人の子の日に何が起こるか。その一つが17章33節に書かれています。「自分のいのちを救おうと努める者はそれを失い、それを失う者はいのちを保ちます。」これだけ読んでもなんのことかわかりません。でもきょうの十字架の場面に当てはめてみたらどうでしょう。最初の男は自分の罪のことには何も触れず、イエスに「おれたちを救え」と要求しました。そのようにして最後の最後まで自分のいのちを救おうとあがき、結局神の国に迎えられることはなく、いのちを失っていきます。

これとは対照的に二番目の男は、自分の罪を自覚し、十字架で処刑されることを当然の報いと受けとめ、隣に神の子キリストがおられるのがわかっても、ただ静かに「思い起こしてください」とだけ言う。こうして二人目の犯罪人は自分のいのちを失うのですが、神の国に招かれていのちを保っていきます。

2) 一人は取られ、一人は残されます (17章34節)

人の子の日に起こることのもう一つ。17章34節。「あなたがたに言いますが、その夜、同じ寝床で人が二人寝ていると、一人は取られ、もう一人は残されます。」超自然的な力が働いて、隣にいた人が急にいなくなる。そんな場面を想像したかも知れませんが、でもこれも今日の箇所当てはめることができます。十字架に縛り付けられている二人の犯罪人。この後死んで墓に葬られていったでしょう。寝床というのは、布団ではなくて墓のことだと考えたらどうでしょう。最初の犯罪人はそのままにされ、罪を告白した二人目の犯罪人が救われていく。まさにこのみことばのとおりではないでしょうか。

誰が救われて神の国に招かれるのか。それを決めるのは私たちではない。神です。もう決まっているから私たちは何もしなくてよいのか。あるいはもう決まっているのだから何をしても無駄であるということか。いずれも間違いです。二人の犯罪人のことを見てください。彼らは二枚のカードを代表していると言ってよい。私たちがイエスに出会うときに、この二つのカードからどちらか一つを選ばなければなりません。

3 十字架

1) パラダイスにいます

「選ばなければならない」と言うと、何か恐ろしく聞こえたかも知れませんが、でも実は何も恐ろしくはない。というのは、すぐそばに救い主がおられ、私たちにこんなふうに語りたくて待っておられるのです。43節。「まことに、あなたに言います。あなたは今日、わたしとともにパラダイスにいます。」

十字架がパラダイス？イエスは悪い冗談を言ったのでしょうか。まさかそんなはずはありません。少し説明が必要です。日本語で「パラダイスにいます」と聞くと、いますでにパラダイスの真ん中にいる、そんなふうに聞こえます。ところが原文を見るとそうではない。今すでにいるというのではなくて、これから間もなくそうなります、と少し先のこととして書いてある。「もうすぐあなたはわたしとともにパラダイス、神の御国に入ります。」そう語ってくださった。

2) 今日

では「もうすぐ」とはいつのことか。「今日」と言っています。しかし「今日」と言われている日にどんなことが起きたか。イエスは十字架で自分の霊を父なる神にゆだねて息を引き取り、墓に納められていきます。三日目の朝よみがえることにはなりますが、それまでは死んだままではなかったのか。死んでいた三日間、イエスがどうなっていたのかは聖書に書かれていませんから、これは推測になりますが、イエスは死んだまま横たわっていたのではない。今日という日に、二人目の犯罪人と一緒に神の国に入られたのだと考えることができます。

こんなことを言うと質問が来るでしょう。例えば第一テサロニケ4章17節には、主が天から下ってこられる日、再臨の日、眠っているキリスト者がよみがえる、とあって、今日という日に神の国に行くわけではない。辻褄が合わないのではないか。矛盾ではありません。神は時間に支配されません。生きている人たちの時計と、死んで眠った人たちが持っている時計、進み方全然違うと考えたらどうですか。私たちにはゆっくりにしかなりませんが、眠った人たちの時計はいきなり主の再臨の日に進んでいく。ですから、「あなたは今日、わたしとともにパラダイスにいます」と言われても、何の不思議もありません。

3) 主は十字架で待っておられる

私たちは人生を歩む中で、自分が十字架につけられたかのように絶望する瞬間を味わうことがあります。十字架にはまったく希望がありません。これほどつらいことはない。そんな希望がまったく見えない中で、私たちはなにを祈ることができるのでしょうか。いま見たとおり、私たちは神の国に迎えられる資格がありませんから、「神の国に入れてください」とはとても言えない。では何も願ってはならないのかというとそうではない。二人目の犯罪人はこう言った。「イエス様。あなたが御国に入られるときには、私を思い出してください。」

これは何を教えているか。罪ある者であっても神に願うことができる、ということです。そして、神はこの告白を待っておられるということです。神はどこで待っていたのか。十字架です。二人目の犯罪人と同じ姿になってです。私たちもおなじ。世界で自分だけが苦しみのどん底に突き落とされ孤独だと泣いていても、すぐ隣に主がおられるのです。聖い姿で私たちの苦しみを味わってください。この方は言われます。「今日あなたは、わたしとともにパラダイスにいます。」

主は十字架においてさえ、罪人を救うために待っておられます。主の御名をあがめます。